
闇夜の死靈～人形の肩越しに～

大庭園

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇夜の死霊／人形の肩越しに／

【Zコード】

Z3357C

【作者名】

大庭園

【あらすじ】

自宅で寝ていた津田隆介16歳に、黒い霧状の死霊が襲いかかる。死霊の心をのぞいて、対峙する隆介。隆介は、死霊を成仏させられるのか。

腕のいい超能力者なら「死靈」と即断できただろう。

靈能力が目覚めて間もない津田隆介16歳にも、少しづつ、状況が飲み込めてきた。

(生臭いな。女の靈か?)

午前1時32分。自宅二階の自室。

月明かりが入つてこぬよう、雨戸を閉めた。電気はすべて消した。豆電球だけつけておく、ということもしない。電球はひとつ残らず消して、部屋を完全に真っ暗にした。

そして、午前一時にベッドに入った。

30分ほどで、隆介のまぶたは重くなつた。

心地よいまどろみが、意識をやわらげてゆく。夜の海水を思わせる暗闇を、隆介の意識はしんしんと沈んでゆく。意識はそつと眠りの底についた。これから一晩、ここで体を休めることになる。そろそろ夢でも始まり、異世界を演出してくれるにちがいない。それとも、意識は眠りの底の砂をもかきわけて、さらに深く沈んでゆくのだろうか。夢すらない眠りの没頭へ。

だが、五分と経たずに目が覚めた。

瞼を開けると、暗闇の向こうに、自室の天井が見えた。

部屋の空気が、しんしんと乱されている。部屋の中に、黒い霧状のものが、侵入している。

霧は、天井をすり抜けてやつてきた。眠つていて気付かなかつたようだ。隆介が目を開けたときにはすでに、霧は自分を構成するすべての要素を、部屋へ侵入させていた。

他人の家へ入ることへの躊躇や、中に住む住人への遠慮は、まるでない。自分がこの家に入り込み、人を呪うのは当然 そういうたげだ。

霧の周囲にある空気は、冷やされると同時に、ぬるく暖められて、

横へどかされてゆく。生暖かい空気は、電気をつけていないから、という原因ではなく、別の何かによって、黒みを増している。そして、ドブ川の水流で舞うヘドロのように、寝ている隆介の上を漂う。霧はこの空氣で場を埋めつくして、「ここは自分の部屋である」という隆介のよりどころを、穴だらけにしている。

隆介がくるまっている布団では、霧が発する寒氣をはね返せない。霧の寒氣は、布団の纖維をすり抜けて、なんら弱まることなく、隆介の体へ到達する。瞬時に皮膚は冷やされ、鳥肌が全身へ広がる。この寒氣は、体温では対抗できないようだ。皮膚の下の、暖かい血が流れる体までも、急速に冷やされてゆく。筋肉や脂肪、そして骨の芯まで。寒氣は、隆介の体のどこへでも、意のままに侵入していく。布団の暖かみは寒氣に負けて、どこかへ消え去ってしまった。

氷山のそびえる氷の世界へ、一人取り残されたような気分になる。だが、氷の単純な冷たさとは、少しづちがう。霧の寒氣には、悲しさがある。それでいて、生暖かさも含んでいる。

十分に寒氣を浴びせた後で、霧はふわりと乗しかかってきた。布団越しに腹の上に乗られたことになるが、重さはまったく感じない。感触がまるでない。だが同時に、鉄球のようなずしりとした重みが、腹を圧迫しているのも確かだ。実際、布団は一つの足が乗つているように、二箇所がへこんでいるではないか。

生臭い匂いが、隆介の鼻をついた。この生臭さには覚えがある。

隆介は三ヶ月前に、人生初めての恋人ができた。16歳。同じ年の少女だ。付き合って一週間そこそこで、彼女とラブホテルに入つた。

そこで、大きな落胆を味わった。

隆介が想像していた性体験に比べて、現実の性体験は、味気も、可愛らしさもなかつた。女性の裸は、小さなものでも、すべすべしたものでも、やわらかいものでもなかつた。隆介は、女性の体とはつまり、男性の体に丸みを少しつけただけの肉塊だと知つた。

なによりも、女性の体に触れてまっさきに得た印象　　「なんて生臭いんだ」。

鼻をつく、あの生臭さ　。

その生臭さを今、この霧が発している。間違いない、女性の死靈だ。

霧の生臭さは、布団の上を這い回り、そして中へ染み込んできた。隆介の体へ到達すると、生臭さはヘドロのよつに湿っぽくなつて、隆介の体を這いずり回つた。

寒氣に生臭さも加わつて、隆介の精神は恐怖による沈黙から、死霊への対抗心に変容した。

このままでは、身が持たない　。

隆介は枕から頭を上げ、布団の上にいる霧を目で確認した。形は人間だ。シルエットはやわらかい。やはり、女性の靈だ。

(やり過ごすことはできないみたいだ)

暗闇に目が慣れるように、目は、靈を見ることにも慣れるのだろう。霧状の人間の細部が、少しずつはっきりしてくる。布団の上に、女性が立っている。黒髪を後ろへ束ねて、黒いスーツを着ている。女性の一つの足の裏が、布団越しに隆介の腹部を圧迫してくる。

(今年の四月に、どこかの企業に就職した新人の○さん?)

女性は、うなだれている。今にも涙を流して、苦労話を始めそうな雰囲気だ。

顔立ちも認識できるようになった。見れば、鼻筋はきりりと通っているし、目もきれいだ。髪の毛もしつとりとしている。この女性は十分、美人の部類に入ると思うが　。

表情から察するに、社会に適応できずに、思いつめて自殺したそんなところだらうか。自分が味わつた苦しみに気づいてほしい。自分の苦労話を、誰かにトコトン聞いてほしい　女性からは、なりふりかまわず助けを求めるような、焦燥と混乱を感じる。

(僕は高校生なので、就職して働くことの辛さはわかりませんが、あなたは本当に苦しんだんですね　とても言えば良いのかな?相

手を受け入れるようなことを言つてあげなくちゃ）

無神経な説教をすれば、悪意のこもった憑依をされるかもしだい。このような靈は、本人が納得ゆくまで、話を聞いてあげたほうがいい。朝になるまで付き添つてあげれば、悪さはせずに去つてゆくだろう。この女性が思い描く理想の親になつて、理想的な受け答えをしてあげればいいのだ。

女性は美人である。そして、うなだれてい。この一つの事実だけを見て、美人なおかげで得をして生きてきたくせに、自分だけが不幸とうねぼれてい。甘やかされて育つたから、軟弱な心しか持てずに自殺したのだ。などと早急に分析し、言いぐるめようとするのは危険だ。

心を刺激せず、苦しみに深く共感し、ともに泣いてあげよう。

（いや、待て！）

隆介が心の中で、自分に向かつて叫んだ。

女性の肩越しに、もう一人、女性がいる。

前方の女性に隠れるように、肩越しからこちらをのぞいている。前方の女性の体で自分の全身を隠し、顔の、両目から上だけを出して、こちらを見てい。

肩越しにこちらをのぞく一つの目には、自信がない。この女性が、自分の姿を見られることに、激しい抵抗を感じていることがわかる。目は、女性の持つ不安と混乱を、はつきりと示してい。美人とはほど遠い容姿で生まれたのだろう。自分に自信がなく、非社交的で閉鎖的な生活サイクルを繰り返した女性であることが、容易に推察できた。

髪の毛は一部分しか見えていないが、前方の女性と同じ黒髪のようだ。が、束ねてはい。そのまま垂らしている。伸ばし放題といつたところだろう。この後ろの女性は、髪の毛の手入れをほとんどしたことがないと、隆介は直感した。

（後ろの女の重みなんだろうな）

腹部を圧迫してくる、ずしりとした重み。これは前方の女性のも

のではなく、後ろの女性の重みだ。体重といったものではなく、悲しさの重み。虚しさの重み。憎しみの重みなのかもしない。

いや、それ以外の何かが、この重みを生み出している気がする。前方の女性は差し置いて、隆介は後ろの女性を見た。注意深く、目を合わせる。女性の目つきを観察する。彼女の目つきから、その心の深遠を察すれば、重みの答えがわかるかもしれない。心の深遠を見出してしまえば、それを形にすればいい。

この田つきが語るもの

(疎外感)

隆介は察した。答えに、にじり寄った。

(途方もない疎外感。未来を想像できない疎外感。生きている間中、味わい続けることがはつきりしている、逃げようのない疎外感。希望がなく、改善も見込めない)

この女性が、悲惨な人生を送ったことが見えてきた。

最初は黒い霧として現れた。彼女は、自分が悲しい人生を送った事實を、誰かに知つてほしいと願つている。「私を見て！」と渴望しているのだ。その一方で、惨めな人生を送った自分を恥じている。「私を見ないで！」と悲鳴をあげている。

自分のことを見て欲しい。だが、直視はされたくない　　彼女の葛藤が、その姿を黒い霧に変えたのだろう。

そして自分の前に、本来なるはずだった自己の姿を浮かび上がらせ、その後ろに隠れているのだ。前方の女性は幻であり、死靈ではない。死靈は後ろの女性だ。

(それならば　　)

隆介は、死靈と目を合わせたまま、イメージを膨らませていった。

(俺みたいなブ男君に慰められても、成仏できないだろうからな)　　自分の顔をえてゆくイメージ　　。隆介の目は一重だが、これを一重に変更する。自信と誠実さを併せ持つた、大きな瞳ができるがった。低い鼻も、高くしてゆく。西洋人を思わせる誇り高い鼻になつた。たるんだ輪郭も引き締めてゆく。短い手足も、すらりと長

くする。

ギリシア彫刻を思わせる、優美なたたずまいの美男子が現れた女性には、そう見えていたはずだ。

隆介は、自分の口は動かさずに、美男子に話をさせた。

「辛かつたね」

話しかけられるや、女性の瞳が生き生きと輝き始めた。私はこれを見ていたといつた表情だ。

美男子は言葉を続ける。

「君は疎外されてなどいない。君は一人ぼっちじゃない。君みたいな女性がいることを、僕は知っている」

隆介は、美男子を起き上がらせた。このまま彼女を抱きしめて、暖めてあげれば成仏

「私は、お前が触れるような存在じやない！ 魁い劣等種は私の視界に入るな！」

前方の女性が、顔を上げて叫んだ。

「魁い劣等種に成仏させられるぐらいなら、私は死靈としてさまよう方を選ぶ！ 私にもプライドがある！」

（俺がイケメン君を操つてることに気付いてる！）

期待のこもった目で美男子を見ている後方の女性とちがい、前方の女性は、美男子を見よつとはせず、布団で寝ている隆介をにらみつけてくる。

二人のまとまりのない反応を、どう解釈すればいいのか。

死靈の瞳の輝きは、美男子に出会えて興奮している という、単純なものなのだろうか。確かに、美男子の幻を作った途端、彼女の瞳は輝いた。だが、その輝きの奥に、星のない夜空のような、味気ない闇を感じるのだ。逆らうことやめた闇。悲しい人生に疲れ果て、「普通」と呼ぶものをひとつひとつ諦めてきた人間の、疲れ果てた諦めを感じるのだ。

死靈は、美男子は幻であると気付いている。幻とわかつたうえで、抱きしめてほしいと願っている。この幻に寒氣を払つてもら

つて、暖まつて、はやく成仏してしまいたいと切望している。

死靈の瞳の輝きには、二つの意味が混ざっているのだろう。美男子に会えたという喜びの輝き。そして、美男子が幻と知りながらも、はやく楽になつてしまいたいという、諦めの涙の輝き。私を受け入れてくれるのなら、幻でもいいと。

その一方で、美男子の本体は隆介であるといふことに、死靈は激しい抵抗を感じているのだ。隆介はおせじにも、女性から歓迎される姿ではない。そのため死靈は、女性としてのプライドから、隆介に抱きしめられることへの抵抗を感じている。その抵抗が、前方の幻に表出しているのだ。

(それならば)

作ったイメージを切り離す。美男子と、自分とのつながりを消してゆく。自ら思考する、単独の存在としての美男子を、そこに置く。(このイケメン君は、僕とは無関係だよー)

独立の存在だ。自分とは何の関係もない。

美男子に抱きしめられるといふことが、隆介に抱きしめられるといつ要素を含むことはない と、死靈を説得する。同時に、美男子を近づけてゆく。美男子は両手を広げて死靈を抱きしめようとする。

前方の女性が隆介に向かって叫ぶ。

「お前なんかに触られたくない！」

(だよねー。そりやそうだ)

「劣等種は近寄るなー！」

(近寄るのは僕じゃないよー。安心してねー)
「来るな！」

(イケメン君、頼むぞー！)

死靈を、美男子が抱きしめた。その瞬間、美男子は球体になつて膨らんだ。そして生き生きと、白く輝き始める。心臓のように脈動しながら、部屋いっぱいに膨らんでゆく。寝ている隆介も球体に包まれた。とても暖かい。冷え切っていた体が、暖まつてゆく。

(こんなのに抱きしめられたら、さぞ安心するだらうな)

そう思いながら、隆介は一人の女性を見た。

前方の女性は、驚いたような顔をして、呆然としている。

後ろの死靈は、目に涙を浮かべている。自分の人生に、本当に疲れていたことが見て取れる。彼女は今、ようやく成仏のときを迎える心の安寧を手に入れたのだ。

球体は少しずつ収縮し始めて、死靈を包み込んでいった。

最後はテニスボールほどの小さな星になり、急上昇して天井を突き抜けて去った。

(終わった)

部屋は再び真っ暗になり、静まり返った。空氣の乱れも、もうない。生臭さも消えて、球体の温もりだけが、隆介の肌に残っている。(よかつた、よかつた。ふうー)

目を閉じて、再びまどろみの中へ沈んでゆく。

隆介は夢を見た。

自分が死靈となり、本来なるはずだった自己の幻に隠れながら、靈能力をもつ女性の枕元へ向かう夢を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3357c/>

闇夜の死霊～人形の肩越しに～

2010年10月8日13時11分発行